

## 関節リウマチと帯状疱疹

### ●帯状疱疹とは

帯状疱疹は、体内に潜伏感染している水痘・帯状疱疹ウイルスが原因となる皮膚科疾患（ウイルス感染症）です。

水痘・帯状疱疹ウイルスは、ほとんどの人では幼少時期に水痘（いわゆる水疱瘡<sup>みずぼうそう</sup>）を生じたのち、体内の神経細胞に潜伏しています。成人になってから疲れやストレス、免疫低下などのために潜んでいた水痘・帯状疱疹ウイルスが再び活性化し増殖すると、神経に沿って帯状に発疹を生じるため帯状疱疹と呼ばれます。

帯状疱疹でみられる発疹は、多くは片側<sup>かたがわ</sup>の胸・腹・背中などに出来ますが、頭部や上肢、下肢に生じることもあります。通常は赤く水疱<sup>すいほう</sup>（みずぶくれ）を伴う発疹で、痛みを伴うことも多く、発熱がみられることもあります。また、発疹が出るよりも先に痛みを感じる期間が続くこともあり、発疹の部位によっては、眼や耳の症状、頭痛、神経の症状を伴う場合もあります。

### ●年間約 100 人に 1 人の患者さんが帯状疱疹に罹患しています

関節リウマチで通院治療中の患者さんにも帯状疱疹はしばしばみられます。第 10 回（2005 年 4～5 月）から第 21 回（2010 年 10 月～11 月）の IORRA 調査（2005 年～2010 年）に参加された関節リウマチ患者さんの回答をもとに集計した結果では、関節リウマチ患者さん 1,000 人が 1 年間通院する間に約 9 人（男性は約 8 人、女性は約 10 人）が帯状疱疹に罹患したという結果でした。さらに、年齢の高い方、ステロイドの服用量が多い方、メトトレキサートを服用している方が帯状疱疹に罹患しやすいということもわかりました。

こちらから英語論文の抄録が読めます。

<http://informahealthcare.com/doi/full/10.3109/14397595.2014.984829>

## ●帯状疱疹になったら

帯状疱疹の治療は抗ウイルス薬（ウイルスの増殖を抑える薬）の内服が基本で、疼痛症状に対しては鎮痛剤による治療も併せて行います。症状の強い方や合併症の多い方では入院して、抗ウイルス薬を点滴して治療を行う場合もあります。発疹が治まっても痛みが続くこともしばしばありますので、早い段階から治療を始めることが望ましいです。

帯状疱疹の治療中は、通常、メトトレキサートなどの免疫抑制薬や生物学的製剤などの治療薬を一時的に休薬します。

## ●おわりに

痛みを伴う発疹が帯状疱疹の症状かどうか気になる場合には、近医の皮膚科や内科などを受診するか早めに来院をして診察を受けましょう。近医で帯状疱疹と診断されたり治療が開始された場合には、関節リウマチの治療についてご相談のうえ指示を受けるようにしてください。

(杉本直樹)

## ビタミンDと骨折

### ●はじめに

IORRAではこれまで2011年と2013年の2回にわたって関節リウマチ患者さんのビタミンD値の調査を行ってきました。その結果、第22回のIORRAニュースでお伝えしたように4人中3人でビタミンDが充分でないことが分かりました。ビタミンDは血中カルシウムを上昇させる働きを持つ大切なビタミンで、骨粗鬆症の発症にも関係しています。今回、ビタミンD値を規定する遺伝子を調査し、ビタミンDが低下しやすい遺伝子型を持つ患者さんが骨折しやすいのかどうかを調べてみました。

### ●ビタミンDが低下しやすい遺伝子型が存在することが分かりました

この調査は、これまでにIORRAに参加してDNAの提供に同意いただいた患者さんのみを対象としたもので、どの患者さんの情報かは分からないように匿名化して解析を行っています。まず、これまでに欧米で行われた遺伝子解析でビタミンD値と関係すること

が報告されているいくつかの遺伝子型について、日本人でも関係があるかを調べました。これは遺伝子型の効果は人種によって差がある場合があることが知られているからです。調べた遺伝子の一つに、ビタミンDに結合してビタミンDを運ぶ役割を担っている「ビタミンD結合タンパク」という体内物質の設計図となっている遺伝子があります。この遺伝子上には遺伝子多型という型がいくつかありますが、このうちの一つのCという遺伝子型を多く持つ患者さんほど明らかにビタミンD値が低値であったことが分かりました。これは「ビタミンD結合タンパク」のビタミンDに結合する部分の構造が変化し、ビタミンDに結合しにくくなっていることで生じているためと考えられています。

### ●ビタミンDが低下しやすい遺伝子型を持つ患者さんは骨折をしやすいことが分かりました

次にビタミンDが低下しやすい遺伝子型を持つと骨折をしやすいのかを調べました。IORRAでは早い時期から骨折についての調査を行っていて、すでに10数年におよぶ骨折に関するデータが収集されています。この情報をもとに今回は大腿骨頸部骨折の累積発生率に関する調査を行いました。その結果、ビタミンDが低下しやすい遺伝子型を2つ持つ患者さん(CC型)は、そうでない患者さん(AA型もしくはAC型)に比べて2倍以上骨折をしやすいことが分かりました(図1)。この結果は世界で初めて報告され

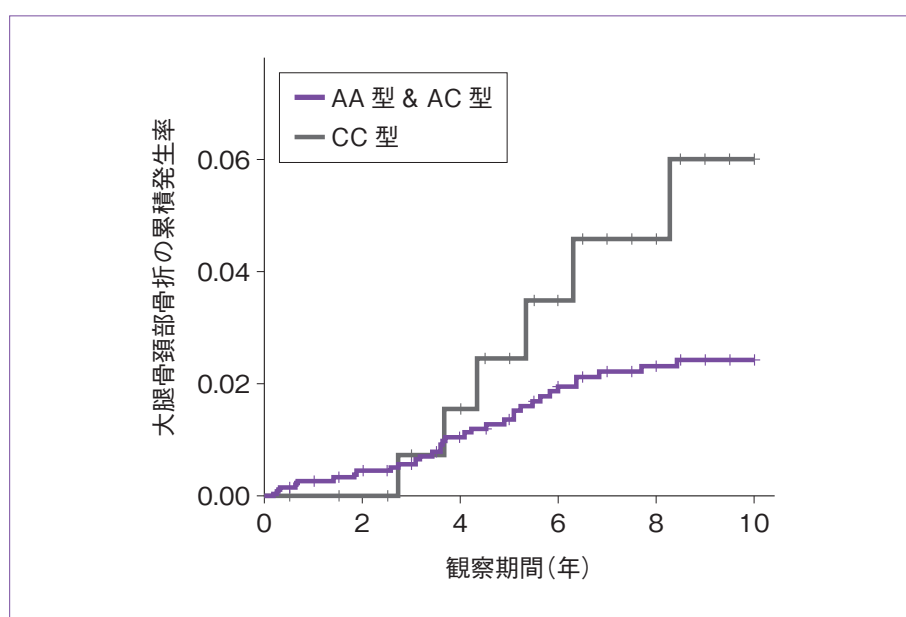


図 ビタミンD結合タンパク : rs2282679

たもので、ビタミンDの持続的な低下によって骨折のリスクが上昇することをあらわしています。なおビタミンDが低下しやすい遺伝子型を2つ持つ人の割合はおよそ16人に1人で、決して多くはありませんし、ビタミンDを積極的に摂取することでこのリスクを回避できる可能性もあります。先日の調査でビタミンDが低いと言われた患者さんは、積極的にビタミンDを摂取すると良いでしょう。ビタミンDは脂に溶ける性質のため、青魚等の脂肪に富んだ魚や卵黄などに多く含まれています。またビタミンDは太陽の光を浴びることによって皮膚でも生成されています。骨粗鬆症財団によると、夏なら木陰で30分程度、冬なら顔や手を出した状態で1時間程度歩けば充分とされています。これらの情報は、国立研究所からの最新情報（平成26年）に基づいています。

<http://www.nies.go.jp/whatsnew/2014/20141127/20141127.html>

散歩は筋力増強にもつながり骨折予防に役立ちますので、積極的に戸外に出かけましょう。

こちらから英語論文のダウンロードが可能です。

<http://arthritis-research.com/content/16/2/R75>

(猪狩勝則)



皆さまの状態が少しでも良くなりますよう、私ども職員一同も力を尽くす所存です。

東京女子医科大学附属膠原病リウマチ痛風センターでは、IORRAで皆さまからいただいた調査結果を、日本の、世界のリウマチ患者さんがよりよい医療を受けられるための資料にしようと考えております。今後とも引き続き、皆さまのご協力をお願いいたします。

IORRA 委員会

東京女子医科大学附属膠原病リウマチ痛風センター  
ホームページ <http://www.twmu.ac.jp/IOR> 上で  
過去のIORRAニュースをご覧ください。  
いつでもアクセスしてください。